

もっと知りたいふるさと

21

森將軍塚古墳と三角縁神獸鏡

善光寺平を一望できる有明山の尾根に、長野県最大の「森將軍塚古墳」がある。今からおよそ一六五〇年ほど前に築造された、全長約一〇〇は、後円部の直径は四五はにも及ぶ、古墳時代前期の前方後円墳である。国の史跡であり、千曲市の誇る歴史的な財産である。昭和四十三年に、石室の全面発掘調査をした結果、勾玉、管玉、銅等と共に県内唯一の「三角縁神獸鏡」の破片が出土した。残念ながら盗掘のため元号等が銘記された箇所は持ち去られ確認できない。しかし、「三角縁神獸鏡」が出土



森將軍塚古墳の初日の出

したことは、「森將軍塚古墳」の被葬者は、大和政権と強いつながりがある強力な組織力を持つ指導者ということであり、高度な知識をもった技術者を使い、約一年半かけて古墳は造られた。副葬品からして、善光寺平一帯を治めた初めでの「科野のクニ」の王（有力者）ではないかと言われている。「三角縁神獸鏡」は、邪馬台国の女王卑弥呼が、魏の国から授かった鏡だ」と当時の京都大学の小林教授が発表した。それは、魏国の元号、景初三年が銘記された鏡が発見されたからである。「女王卑弥呼」が魏の国洛陽の「明帝・曹叡」へ納貢したのが二二九年、魏の元号で言うところと景初三年となる。魏升米、都市午科が奴婢（奴婢）十人、布等を持参し朝貢をした。魏国からのお札に銅鏡百枚、金印等を授かり二四〇年の正始元年に帰国したと中国の古書三國志・魏書・東夷伝、倭人の条、略して「魏志倭人伝」に書かれている。

今年の三月、奈良の黒塚古墳、箸墓古墳等を視察してきた。黒塚古墳は三十三面の「三角縁神獸鏡」が、棺の周りに置かれていた未蓋の古墳である。箸墓古墳は「卑弥呼」の墓ではないかと言われる最古の前方後円墳である。近くには「邪馬台国」の地と言われる纏向遺跡がある。黒塚古墳から出土された三十三面の「三角縁神獸鏡」からは、元号が銘記された鏡は一枚もなかった。景初三年銘の鏡が出土した古墳は、鳥取県の神原神社古墳から景初三年銘の「三角縁神獸鏡」が一枚、大阪府の和泉黄金塚古墳からは景初三年銘の「平縁神獸神鏡」が一枚出土した。「三角縁神獸鏡」が全国で出土した枚数は、百枚どころか五百枚ちかくも出土している。魏国にならぬ元号が銘記された景初四年銘の鏡が京都府から出土した。「明帝・曹叡」は景初三年一月逝去し、翌年は正始元年と元号が改められ、景初四年はありえないからである。「卑弥呼」は現在、弥生時代の女王となっており、古墳からなぜ「三角縁神獸鏡」が出土するのか疑問とされてきた。

箸墓古墳近くの纏向石塚の周濠から木製品が発見され、一年輪年代測定法で分析をすると、この遺跡は平世紀以上は遡るといふ研究結果が出た。とすると、この遺跡は三世紀前半となり、「邪馬台国の女王卑弥呼」の時代は古墳時代に人ってしまうのである。「森將軍塚古墳」から出土した「三角縁神獸鏡」の破片から、「天王日月」の文字が読み取れる。京都府椿井大塚山古墳と岐阜県電門寺一号墳からも、同様の文字が確認できる鏡が出土している。その鏡は「獸文帝四神四獸鏡」と言われる。



天理市立黒塚古墳展示館内の堅穴石室

更埴郷土を知る会 会長 鎌倉 治雄
千曲市八幡在住

もっと知りたいふるさと

22

登録有形文化財

荇沢川石堰堤

災害は、忘れた頃にやってくる
とは昔の話、最近忘れなくとも
地球環境の変化によるのか、頻繁
にやってくる。このような状況の
中、全国で防災工事が進められる
一、防災教育も行われている。
そこで、我が郷土に係わる災害
と防災整備の事例を少し歴史を
遡って紹介したい。

現在、地元桑原に在住する関章
さん(明治の初期に郡長を勤めら
れた関長堯から四代目に当たる)
のお話及び「桑原村誌」、「更級郡
誌」並びに、長野県千曲建設事務
所の資料説明によると、徳川時代
後期から明治の初期にかけ、桑原
集落中心地(旧善光寺街道桑原宿)
の北方大田原付近から南へ流れ下
る荇野川支流の荇沢川は、流域は、

狭く上流部は急流で地質が新し
い時代の第三、四紀層で脆弱なた
め、幾度もの豪雨による土砂災害
に見舞われた。当時の松代藩は、
その都度普請していることが記録
に残されている。今なお下流耕作
地に土砂の被災痕跡が見られる。
このような当時の状況下におい
て、明治維新に入ると、地元の先
駆者たちは当時の内務省へ災害防
止の整備を要望。これが認められ、
国の直轄事業により、工事は明治
十二年から同十七年の六年間にわ
たり実施された。事業規模は労働
力すべて人力の石工、工業天延べ
約三万二〇〇〇人を動員。石材は
稲荷山湯ノ崎地先のほか、付近地
から採取運搬。施工延長三百五十
この区間に石堰堤四基、及び渡路



案内図

その他付帯施設から
なる大規模砂防施設
を、明治十七年六月
に完成したが、それ
から百三十余年経過
し、史実が明らかに
なる中、これら先人
の功績を後世に伝え
るため、平成二十年

地元代表者により、千曲市教育委
員会及び長野県千曲建設事務所
登録有形文化財を申請し、同二十
一年一月文部科学省(文化庁)登
録となり現地にレリーフが設置さ
れた。

そこで、施設の特徴を千曲建設
事務所の説明によれば、施設構造
を現地地形に合わせ、堰堤四基と
渡路を配置し、水通し底部には大
きな石を、袖部には小さな石を組
み合わせ、三号堰堤は袖部を基岩
まで延ばして、河床を安定させ、
堤体渡路共自然の中に溶け込み、
緩やかな曲線美を創り出している。
また、河岸山腹にはニセアカシヤ等
を植樹し、急斜面の崩落防止を図
るなど当時の砂防技術水準の高い
ことを示していると評価している。

以上、当時の土砂災害に係わる
防災事業について紹介した。山間
地で目立たない存在であるが、今
なおその役割を果たしていること
に心が打たれる。また、当時の一
山村桑原村の先駆者が時の明治政
府に働きかけ、国・県と一体とな
って、大事業を成し遂げた心意氣
に敬意を表するとともに、現代を

生きる私たちは、このパワーを現
後世代に語り伝えることを忘れて
はならない。是非現地を訪れて当
時の事業を思い起こしていただき
たい。なお、桑原振興会では、ポ
ランティア事業で毎年草刈り作業
を実施し、景観保全に努めている。



荇沢川第七号石堰堤レリーフ



第一号石堰堤

参考文献
●「桑原村誌」昭和四十二年七月発行
●「更級郡誌」大正三年三月発行
●「登録有形文化財荇沢川石堰堤」
「明治の砂防事業」
(長野県千曲建設事務所レリーフレット)
桑原 柳原 清治

もっと知りたい
ふるさと
24

千曲川とのたたかい

杭瀬下というところは、水との深い関係がある。その昔、寛元二年（一一四四）埴科郡舟山郷青沼村と称されている。元禄元年（一六八八）芭蕉が入信し、娘捨で「おもかけや狭ひとりなく月の友」という名句を残している。市内にも芭蕉の句が多く残っているが、千曲橋のたもとに、「蜻蛉やとりつき兼し草の上」という「くいせけ連建之」の「芭蕉家」がある。青沼村時代から、千曲川によって沼地ができ、とんばの水蝨の棲息



芭蕉家(句碑)

地で、生い茂る草の上をとんばが飛んでいる様子が描写されている。

杭瀬下の歴史は、水という自然とのたたかいである。まさに村を治めることは、水を治めることとて過言ではなかった。慶安三年（一六五〇）から昭和の終わり頃まで約三三〇年の間、三年から四年に一回の割合に、水害の被害を被っており、そのため、中之条代官所へ川除普請用材の払下げを申請している。また、固堤という、増水時堤上をオーバーした水が、また堤内へ戻入するような仕組みの堤防になつてから農作物を守るようになった。百姓は、水害の都度、代官所の命令で川除普請作業にかり出され、堤の補修などもした。水害になるとそれにもめげず、田畑の復興に雄々しく立ち上がり、現在のような肥沃な耕地を維持してきたのである。古

老が田畑へ働きに出掛けることを「沖へ行く」といったことを思い出す。それは、田畑の直接耕作ばかりでなく、水害の復興復旧作業をしたのである。

災害状況を表わすことばに、川欠(田の水引堰が土砂で埋まってしまうこと)、川成(予想しなかつたところに自然の川ができたこと)、押堀砂石入(水の勢で田や畑がえぐりとられ石や砂が入ってしまったこと)、起返(かたくなつた土地を作物が生育するようにたがやすこと)がある。このように、先人は災害復興のため祖先伝来の土地を守ってきたのである。

明治十五年（一八八二）杭瀬下絵図によれば、高川原・東前川原・堂河原・中下川原・柳川原・三ツ川・欠下(崖下)・砂川・見崎と川や水にちなんだ地名が多い。これらの地名から何を想像することができるだろうか、先人の努力の結晶により水害場所を耕作地にしたことにはかならない。

ここは、水禍の多い地域であり、丹精こめた農作物の支那が水害のとき流されていったことを、筆者は見聞したことがあった。昭和五十八年（一九八三）更埴市時代に、市庁舎の西側にある杭瀬下土地三六号が都市計画によって、住宅地帯に指定された。そして、杭瀬下土地区画整理組合によって都市計画事業が施行された。区画整理事業と一体となって、市役所により、尾



尾米川排水ポンプ場

米川の改修と尾米川が千曲川に流れるところ、昔の名前で落尻に、立派な排水ポンプ場ができた。これによって杭瀬下は水害から免れることができた。これはまさに「治村治水」である。

・参考文献 「杭瀬下村誌」

近藤 明

もっと知りたい
ふるさと

25

かしろいし
力石条里遺跡群

力石条里遺跡群は、千曲市大字

上山田字桑師堂地跡を中心として広がる、縄文時代から中世にかけての遺跡である。この遺跡は、千曲川左岸の沖積地に位置し、力石地区を含み、南は坂城町上五明桑里水田址に接している。

主要地方道長野上田線力石バイパス建設事業に伴い、道路用地内を長野県埋蔵文化財センターが平



出土した弥生時代前期末の土器

成十三年度から二十年度まで発掘調査を行った。この調査によって、縄文時代中期・晩期の土器片、弥生時代前期末から中期中葉の墓跡、弥生時代中期後葉の住居跡、弥生時代後期の住居跡、古墳時代Ⅰ中世の掘立柱建物跡・溝跡などが確

認された。

中でも注目されたのは、弥生時代前期末～中期中葉の墓跡と、弥生時代後期の集落跡である。この墓跡については、直径1.1～1.5m、深さ0.8m程度の円形に近い形状の穴で、中からは焼けた骨や副葬品と思われる玉や、完形の壺などが見つかっている。出土している土器の中には、地元製に混じって東海地方製の土器も見つかっている。

このことから、弥生時代の初めの頃に、東海地方の米作りの情報をこの地に伝えた人びとが、故郷から持って来た土器を使って埋葬したのではないかと想像させられる。また、これらの墓からみつかった骨は被熱しているのが特徴で、この点は、東日本の壺の中に埋葬する「壺棺再葬墓」と似ている。この地点で発見された二基の墓からは完全に近い土器がみつかった。その中の一つは「条裏文系土器」と呼ばれる東海地方で流行した土器で、他の一つはこの地元製の土器である。このことから、東海地方から移って来た人びとがこの地に住みついていたことが何



力石条里遺跡の弥生時代前期の墓跡

える。また、この条裏文系土器を携えて来た人びとは、米作り情報を長野盆地にも伝えたのではないだろうか。

このほかにも、出土品の中には、東北や北陸・関東地方製と思われる物もある。このことから、これらの地方との交流があったと想像される。

なお、弥生時代後期のムラ（集落）の分布状況から見ても、登呂遺跡と似て、集落の周辺には水田が広がっていた、当時の景観が想像される。

資料提供：長野県埋蔵文化財センター

文責 鎌原 賢司

もっと知りたい
ふるさと

26

「戊の満水」から思うこと

大震災や水害に加え、火山の噴火等最近の地球環境は、「想定外」で済まされない時代である。昨年の三・一一の災害を機に、「戸倉史談会」では、地元の災害文書を読み解く中で、寛保二年（一七四二）の大木害「戊の満水」に触れ、大河千曲川が生活に与える影響力の強さを再認識したところである。

近世最大級の「戊の満水」は、秋雨前線と台風の通過が重なり、中部・関東地方に大被害を与えた。当地でも、旧暦七月二十七日から降り出した雨は八月一日まで降り続き、千曲川流域全域に大洪水をもたらした。洪水だけでなく山崩れも多発した。当時の松代藩領内で九百件以上の山崩れが発生した記録が見られる。今回読み解いた文書にも、更級地区に山崩れの記録が残っている。被害状況は、各地に伝承や文書、慰霊碑等で伝えられており、中野市立ヶ花水位観測点付近の水位は、一一日程上昇し、流域の死者二千八百人前後といわれている。



堤防決壊被害絵図

戸倉地域では、上戸倉の堤防が決壊、加えて、八王子の「獅子が鼻」に当り蛇行した千曲川本流は、現在の戸倉上山田中学校の辺りで堤防を突き破り、上徳間・内川の地域の住居・田畑の大半を押し流した。徳間村で六五人、内川村四九人、千本柳村二人が亡くなっている。また、下流の岩野では一八〇名と記録されている。流された家も多く、「当八月中満水に付き流れ家五八軒」とある。個人別書上記録には、居宅・物置・灰屋・土蔵が全て流失の記載があり、私財

全てを失った家族も多い事がある。

これらの被災した人々には、二ヶ月後には家を建てる材木が、藩のご用林から切り出され提供されている。多くの田畑は、千曲川の川筋となり耕作出来ない状態となった。水害の翌年には、代官所からそれらの荒地に、藩の重要産物である漆の苗木を植え付けるお触れが出されたようである。それに対する、このような文書も残されている。「当村の儀、去年中満水にて残らず川欠罷り成り、植付申べき所御座無く候、この末砂入り等の場所、何分にも切起し、御田地に致したく……」と、代官所に訴えている。その後三〇年以上かかって元の収穫量に戻している。昨年の津波災害を顧みても、今の居住環境は、過去のどのような場所だったのかを振り返っておくことも有意義なことである。千曲川治水の歴史は古く、慶長年間（一六〇〇年代初め）松平忠輝の統治時代に、戸倉地域に高さ二間長さ千間の土手が築かれたとある。その後も幕府や

藩による治水工事が継続されていくことになるが、川筋が現在の堤防内に固定されたのは最近のことである。近世までは、東西の山並みの間を洪水の都度流路を変えていた。この事は、農地が整備される前、まだ家数も少ない昭和二十二年に撮影された戸倉地区の空中写真に、その流路変遷と自然堤防を利用した集落の姿を見ることが出来る。



空中写真(1947年撮影)

現在は、防災技術も進み、千曲川の堤防も当時の霞堤から連続した格段強固な、信頼のおけるものになっているが、過去を知り、不測の事態に対応できる心構えが必要な時代であると思うところである。

資料提供 村山汎亨氏 他
戸倉史談会 北村 主計

もっと知りたい
ふるさと

27

八幡の「七頭」巡り

なながしら

八幡では、昔から「七頭」について、いろいろと語り継がれています。しかし実際には、「七頭」そのものがどこにあり、どのようなものかは意外と知られていません。そこで、以前から一度行ってみたいと思っていた「七頭」を歩いてみることにしました。

まずは、志川の「柳清水」から探索を始めました。現在は、公民館に水神様として祀ってありますが、かつての湧水は、西沖地籍の真光寺跡にありました。池は埋められてありませんが、地籍の土手を降りていくと清水を見ることが出来ます。水温は年中一二℃から一三℃を保っているそうです。



志川の「柳清水」水神様

次は、国道四〇三号線を「峰の頭無し」、別名「山の神」へ向かいます。碑があり、そこを道下に降りていくと、わずかの水量の湧水があり、辺りにはわさびが生えています。

三つ目の「郡の頭無し」は、四〇三号線から遊歩道を右に入り、山道を行き少し広くなっている所にあります。ここにも湧水が出ています。以前来た時は、滝のように出ていた記憶があります。ドウドウとすごい音をたてて流れていました。ここは、標高六五〇mの場所にあります。ペットボトルに水を汲んで持ち帰り、沸かしてお茶にして飲んでみると、甘くておいしい味がしました。

また車に乗り「中原の頭無し」を目指し、奥へ登っていきます。そこから杉林の中を下って行くと、陽が当たらずジメジメし、杉っ葉が積もって足元がすべります。倒木をまたぎながら急な坂を降りていくと、水神様が見えてきます。ここは、どこを掘っても湧き水が出てきます。大きな岩のかたまりがあり、岩の下からパイプが引かれています。この水は「姨捨正宗」のお酒造りに使われています。

「おんべ」が飾られており、中原地区では七月にここまで登って来て祭りを行っています。辺り一面は森閑としていて、神秘的な空間を感じました。

同じ道に戻り、国道に出て、五つ目の「小滝の頭無し」へ向かいます。展望台の手前の道下に降りていくと、白い可憐なフタリシズカの花が咲き、「小滝の頭無し」が見えてきます。下には中央道が走っています。ここへは下の道から登ってくることもできます。

六つ目の「嘉歴の頭無し」へ向かいます。眼下には大池地区が見渡せます。大池キャンプ場へ行くカーブの道下へ降りてみると、湧水は見当たりません。しかし、堰堤跡があり、以前は水道水として、大池・姨捨・代・峰・上町・辻で使われていました。松代地震の際、水位が下がり、井戸を掘り自噴して七〇mまで水位を上げています。現在は、佐藤さん宅の庭に水が流れ出ているということです。

いよいよ最後の七つ目の頭無し「弁天清水」のある大池へと向かいます。ここへは、池の南側の山道を登ります。子どもたちの遊び場もあり、小径を行くとミズの白お



大池の「弁天清水」水神様

花が咲き、せせらぎが流れています。しばらく歩くと上の方に水神様が二か所見えてきます。ここは、しっかりとフェンスで囲まれていて、湧水は日量二八〇ℓと多量に出ています。

七つの泉の水質は全てPH7となっていて、「七頭の湧き水」をすべて口にしてみましたが、「弁天清水」の水は、他の六か所より柔らかく感じました。何百年と枯れることなく聖山系のどこから湧き出してくる泉。これらの湧き水は、八幡地区の水道水の源として、また、田畑を潤し、おいしいお米が作られる元となっています。

「七頭」巡りを通して、自然の雄大さに感謝し、この「七頭」を大切に保存していきたいと感じました。

八幡上町 宮坂 直子

もっと知りたいふるさと

28

塚穴古墳に魅せられて

塚穴古墳は、稲荷山篠山の標高五一〇メートル通称「陣ヶ窪」の山腹にあり、直径約一二メートル、高さ四・五メートルで、南に開口する横穴式石室を設けた古墳時代後期（六〜七世紀）の築造と考えられる。

埋葬施設の横穴式石室は羨道部（石室への通路）の一部が壊れているが、玄室（棺を納めたところ）はよく残っており、長さ五メートル、奥壁幅二・七メートル、高さ二・五メートルの羽子板状の両袖型の横穴式石室となっている。奥壁は大石を二枚



古墳入り口にできた氷筍

並べ、その上に横長の石をのせている。側壁は、下部に横長の大きな石を二段積み、その上に小さな石を四段積み、天井は大きな石、五石で石室を築いている。羨道部は長さ約二・七メートルほど現存しており、幅一・七メートル、高さ一メートルほどである。本古墳からの副葬品などはなく、正確な築造年代や埋葬された人物については不明である。（千曲市教育委員会現地案内板を参考）

昨年七月頃より、塚穴古墳に魅せられて、夏の暑い日古墳の雑木、雑草等の刈り取りをした。葛の木・アレチウリ・藤つるが生い茂る中には、たぬき等の巣が四つもあった。それらも全部取り払った。消防署の許可をいただき、平成二十三年度の区長の皆様のお力で何回かに分けて燃やし、綺麗にした。草を刈る中で、塚穴古墳には、日本古来種の日本タンポポが数本あることも分かり、「この古墳を日本タンポポの里にしたら」とい

う話になった。今年もタンポポの種を古墳全体に蒔いた。日本タンポポの他に、山スミレ等も移植し始めたところである。近くには、長野市の「越将軍塚」があり、塩崎地区の方が年に何回か草刈りをして管理している。塚穴古墳も越将軍塚に負けないようなすばらしい古墳にしたいものである。

飛鳥時代の先駆者が機械の無い時代にこのようなすばらしい古墳を残してくれた。飛鳥歴史公園内の石舞台古墳は、入場料を取っている。塚穴古墳は少し小さいが、見学無料で誰もが自由に見ることができ

る。一月の厳寒期は、古墳の入り口に十五本程度の氷筍ができて、初めて百人程の人たちが見学に訪れた。雪が積もれば、動物の足跡が幾つも見られる。春初めは、オオイヌノフグリ、付近の畑で栽培している桜、ボケでお花見ができる。五月は、日本タンポポのお花見ができる等、古墳に来ればもう

一つの楽しみ方ができる。古墳の頂上から眺める埴捨山や千曲川の流れ。古代の人たちはいい場所を選んだものである。今の古墳の住人はコウモリで、十五匹程度住んでいる。現地に行く時は、コウモリを驚かせないようにしてほしい。千曲市には、約四百八十基の古墳・史跡があるが、すべての古墳・史跡を次の代まで大切に引き継ぎたいものである。塚穴古墳をここまで

私たちに手を入れさせていだいた千曲市教育委員会文化財センターの皆様、心より感謝申し上げます。

稲荷山 小林 和夫



古墳入り口にて、見学者を撮影

もっと知りたい
ふるさと
29

「矢代宿」

宿場町の悩み

屋代は、慶長十六年（一六一

一）に、松平忠輝とその付家老五名の連名で出された「傳馬宿書出し」により、北国街道の宿駅となった。これによって「矢代宿」が成立して、現在の屋代の基礎が形成されたのである。

宿駅となる以前は「屋代」と書いていたが、なぜか「矢代」という文字が使用されている。しかし、その理由は全くわからない。

また、矢代宿の間屋の記録には、「最初は散村であって、軒並びにはなっておらず、約十年たつてようやく『山王宮』付近だけ形が出来てきた。これが本町であり、新町は更に約三十年かかって、宿場が形成されていった」と記載さ



矢代宿「善光寺道名所図会」より

れている。

本陣の家系にある柿崎多膳が江戸末期に書き残した『屋代記』によると、この矢代宿の最大の悩みの一つに火事を上げることが出来る。藁葺の屋根、軒並びの住居、消火用の水が少ないこと、未熟な消火技術等から何回も火事になったことがわかる。

その一 延宝五年（一六七七）七月、本陣が焼失した。それから四十年ほど過ぎた享保二年（一七一七）三月、また焼失した。その折には大金を賜り普請し、座敷も作っている。更に、明和三年（一七六六）の矢代宿大火で類焼し、自普請をしたが、文政六年（一八一三）には大改築し、殿様が宿泊できるようにし、それから

は加賀宰相様が泊まる御旅館になった。

その二 生蓮寺は、元禄十六年（一七〇三）近辺より出火して類焼してしまつた。その後、明和三年宿中焼失の時にも類焼してしまつた。そこで、一

重山の麓へ寺を移したが、文政九年（一八二〇）には、庫裏ばかりを焼失してしまつた。本堂は瓦葺の屋根だったので残つたのである。

その三 明和三年には宿中が類焼してしまつた。その日に、杭瀬下村の勝徳寺及び村方百軒ほどが類焼してしまつた。

その時、矢代宿では、山王宮本社拝殿は残つたが、神主の家は燃えてしまつた。高見では傳左衛門という者の家一軒が残つた。理由はその年に祭礼である「一つ物」を請けていたので、神徳だと言われたと伝えている。

その隣は兵七といい、その時土蔵を造っており、普請していてまだ泥土が乾かなかつたので残つたのである。

その日、出火最中に加賀様が御通行で、当宿で昼休みと決めてあつたが、出火のため篠ノ井の唐猫神社に暫く待つていただいた。しかし、なかなか鎮火しないので、西裏通りを御馬で、ご本陣の柿崎源左衛門がご案内をして小島村



須須岐水神社境内にある秋葉神社

までお連れした。両組のお百姓へ金二十両下され、ご本陣と問屋へも二十両を下さつた。

この他に、天明六年（一七八六）朝火事、同年薬王院の

火事、安永年中の落雷による火事、寛政十一年（一七九九）の火事、文化四年（一八〇七）夜の火事で五、六軒焼失、文化十二年（一八一五）夜火事で数十軒焼失等々、三十件以上に及ぶ火事の記録が『屋代記』に記載されている。

以上から、矢代宿では、大きな火事が三十件以上もあり、被害が大きかつたことがわかる。当時の消火技術が未熟だったたり水を掛ける技術が乏しかったことによる。宿場の住民は、瓦葺の屋根にする、土蔵造りの家にする、卯建をあげる、川べりには秋葉神社を祀る等、色々な工夫をしていた。

屋代公民館長 中村 寛

もっと知りたいふるさと

30

花栽培の新技术

「西村鉄砲第一号」と聞いて何のことかわかる人は、ごく限られた方だろう。実を言うと、これは、二十年にわたる努力で気品と美しさを備えて評判になったユリの花のことである。昭和二十六年、花の部では、日本の品種登録第一号という輝かしい記録を持つ。この花の生みの親が、埴生の桜堂で生まれた西村進さんという方である。



咲きそろう「西村鉄砲ユリ」

もっと詳しく知りたいと思いい、西村邸を訪れることにした。長男である一幸さんに昔話を交じえてお話を伺うことができた。その話の中で、なる程と思ったのは、進さんの父上も進さんも花が好きだったことだ。好きなだけでは生業とすることはできないが、好きであることが元にあつてこ

そ苦難を乗り越える原動力になつたに違いない。

資料によれば、進さんは明治三十九年生まれで、埴科農蚕学校（現屋代南高）を出て家業の養蚕を手伝っていたが、体も強くないから好きな花づくりをしたと千葉高等園芸（現千葉大）へ。東京の多摩川近くの「温室村」で実地勉強した後、昭和三年、桜堂へ帰り、切り花づくりを始めたという。当時は、花づくりといつてもあまりやる人はなく、奇妙な目で見られたらしい。でも西村さんの努力があつて、十数年経つと次第に地域へも広まり、東京向けの切り花産地の先駆けとなつたという。

昭和三年在来の鉄砲ユリによく似た「高砂ユリ」が台湾から輸入されて人気を呼ぶ。実生から九カ月、しかもユリのない秋に咲くという鉄砲ユリにない長所を持つうえ、色も白。しかし進さんは花に斑のあるのが不満で、数千本咲かせた中から純白に近い物だけを選び、次の年育てる方法

で、一〇年かかって純白の高砂ユリをつくり出す。しかし香りがなく、病気に弱く、葉が長すぎる等、見劣りする。そこで高砂ユリに青軸鉄砲ユリをかけ、できた物に更に……という具合。だが、交配といつても一年に一回しかできない。栽培技術もユリの生態もわからないから試行錯誤の繰り返し。一サヤずつ種子を蒔いては記録札を付ける。これを数千本やる。失敗続きのため、他の切り花の利益もユリにどんどんつき込む。種蒔きは十一月に温床へ。五月に定植。今のように電気温床などないから、夜は温度調整が大変。雨が降れば、コモをかける。暖かい昼間は、それをはずす。「子ども心にも辛い仕事でしたよ」とは、一幸さんの話。

また、「終戦後、何とかよい花ができるようになると、東京の朝の市場に出荷するため、夕方、できるだけ新鮮な花をコモに包み、屋代駅へ自転車の荷台に積んで何度も運ぶ父の姿は、今も忘れられない」



西村進氏頌徳碑

と言う。

西村邸でびっくりするのは、庭先に立つ「西村進氏頌徳碑」である。土台から六尺以上ありそう。当時の業界紙によれば、「地元埴科郡を中心に一般の寄附を募り竣工」とあり、その業績は「西村鉄砲を初めカーネーション」「乙女の笑」「黄色の波」「瑞星」等の作出に成功。また、県花卉組合長等の役職も多数歴任された」とある。

話をお聞きしたり、資料を読みながら進さんの功績の一番大きい点は、「地元の花づくりの発展に尽力したこと」ではないだろうかと感じた。

文責 青木 聡

参考資料

- 『信州の人と産業』
- 昭和四十五年（信毎）
- 『明日を築いた人々⑩』
- （宇津木元）昭和五十七年（信教出版）等

もっと知りたい
ふるさと

31

松代騒動は 上山田村から

松代騒動については、昔から数多くの文献や研究がなされている。これらによると、この騒動は明治三年（一八七〇）十一月二十五日から始まり、松代藩領の全域と近接する他藩領を巻き込む四郡にわたって起きた。

発端となったのは、二十三日に上山田村へ「石代納は金十両に初四俵半相場、藩札は額面の二割五分引き通用」とのお触れが届いたことである。当時、村では弥勒寺地籍の山地開発が行われており、工事完成前に労賃は藩札で支払われていた。そのすぐ後にお触れが出されたことが、村中に

衝撃的な話題となって広がった。

更に民衆には、藩政の数多くの失政による混乱に対する不満があり、改善要望が大きかった。これらが、嘆願行動への導火線になった。開発に携わった人たちは、小前総代宅へ赴き、藩への嘆願を依頼した。

二十五日に「名主三人と小前総代が藩へ行っており、時刻には結果がわかる」ということで待っていたが、なかなか帰ってこなかった。帰村が遅いのは「藩がお触れの取り消しを渋っているのだ」「捕らわれてしまったのではないかなどと、議論は高まった。村

人たちも不安にかられ、手に手に松明を持って集まって来ていた。終始議論に加わっていた小平甚右衛門は「もう我慢はこれまでだ」と直訴の人々を集めるため、丸山に登り半鐘

を連打した。

その後、女沢・新山・力石・上平・網掛・上五明を騒ぎ立て、集まった人数は三千人に達していた。そして、力石に戻り二手に分かれ、松代に向かって出発し、城下の郷宿の伊勢屋伊兵衛宅で合流した。この間、近隣の村々から合流した百姓たちはどんどん膨れ上がり、その数は二万人に達した。

伊勢町付近で頭立の小平八郎左衛門が来て「願いの筋があれば何なりと申し立てるので穏やかにするように」「知藩事が大英寺へ入られたので、そこで控えているように」と伝えた。甚右衛門たち代表者は藩札についてだけでも嘆願しようとして大英寺へ赴き控えていた。やがて、村役人が来て「石代納は金十両に初四俵半相場、藩札は額面通りの通用」であることを伝えた。その後、

帰村のため紙屋町の大信寺で全員が賄いを頂き控えていると「十二月五日から藩札を官札に引き替えることと、石代納は十両につき初七俵に切り



頌徳碑及び遺言碑

替える」という書付を見て、訴願が通ったと判断して喜んで帰村した。

この騒動の検挙者は六百三十人、斬首は最終的には甚右衛門一人になった。これは首謀者とされた甚右衛門が罪を他に及ぼさないように一人で被ったからといわれている。

甚右衛門は、明治四年五月二十六日「鳥打峠」で処刑された。処刑にあたり「子どもへの教育はたいせつなり」の遺言を残したといわれている。

頌徳碑及び遺言碑は、上山田村字羽場山伏塚の東麓の地に建立されている。

文責 山崎博也

参考資料

「上山田公民館成人講座（地域の歴史と古文書を学ぶ）松代騒動」

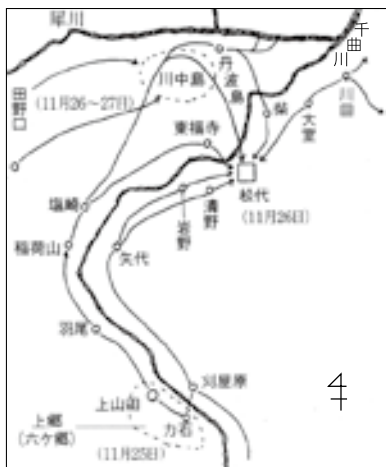
柳澤 哲

「上山田公民館成人講座臨地研修松代騒動」

鎌原賢司・宮原英夫・宮原哲雄

「上山田町史」一九六三年

「副読本上山田の風土」一九八七年



松代騒動の動き

4

もっと知りたい
ふるさと

32

さらしなは
地名遺産

冠着山の麓に更級地区と呼ばれる地域があります。昭和の市町村合併（一九五五年）の前まで「更級村」だったことから現在も村の名を残し、そう呼ばれています。

私は地元の更級小学校を卒業。中学で、平安時代の都の貴族女性が村の名前を題名にした『更級日記』を書いたのを知りました。なぜなのか調べてきて、分かりました。さらしなは、古代から京の都人たちの強烈なあこがれだったのです。

平安時代の都人は雪月花という言葉に象徴されるように、



佐良志奈神社の社標和歌

白を「至高の色」とする美意識を育みました。神社の神官の装束が白であるように、白色には神聖、高貴、清潔、純粋などのイメージが重ねられています。さらしなも白色を連想させる「さらす」「サラ」などの言葉と音の響きが似ているため、同様のイメージを都人はさらしなに抱いたのです。

証明する材料はたくさんあるのですが、ここでは江戸幕末に京都の貴族歌人が詠んだ和歌を紹介します。更級地区若宮にある佐良志奈神社の社標に刻まれています。

月のみか
露霜しぐれ雪までに
さらしさらせるさらしな

露や霜もいつの間にか雪に変わった、月の光を浴びて白いさらしな。純白さがより一層際立っている。ただでなくすべてのものが真っ白になった里、それがさらしな。当時の宮司豊城直友さんが

上京して歌の名家に依頼したもので、平安から千年の後も「さらしな」に至高の白色を見る美意識が受け継がれてきたことが分かります。

さらしなは「月の都」としても都に知られ、都人のあこがれ感がよく分かる和歌も紹介します。豊臣秀吉です。

さらしなや
雄島の月もよそならん
ただ伏見江の秋の夕暮れ

「雄島」は宮城県松島湾に浮かぶ一つの島で、松島も月の美しさが都に知られていました。「伏見江」は秀吉が築いた伏見城下（京都市伏見区）に広がっていた巨椋池（現在は埋め立てで消滅）のことで、湖面が月光を美しく反射させていたのでしょう。

秀吉のこの歌は、名月で知られる更級や松島も伏見の月の美しさにはかなわないと、国自慢したもの。裏返せばそれだけ強いあこがれをさらしなに抱いていたわけですね。秀吉より百年余り後の松尾



秀吉が詠んだ「さらしな」の和歌（京都市の高台寺所蔵品の図録から）

芭蕉も秀吉と同じあこがれを抱き、当地を訪れ紀行文『更科紀行』を書きました。

「さらしな」の月をより美しく見せる舞台装置、千曲川の役割も強調したいと思います。古来、月の名所は先の松島をはじめ、月の光を反射させ白光空間を演出する海や池など水がある所です。冒頭で触れた雪月花という言葉にあるように月も白い輝きが美しいとされてきました。「月の都・さらしな」の誕生には、千曲川が演出する月の白さと、純白をイメージさせる「さらしな」の地名の響きが大きく関係しています。

二〇〇五年、大岡村が長野市と合併し「更級郡」は消滅。更級という行政区画名はなくなっただけで、地区名として千曲市に定着している「さらしな」は地名遺産です。世界に誇っていい地名です。さらしな堂代表 大谷善邦

もっと知りたい
ふるさと

33

「探し歩記」
姨捨三大絶景ポイント

今回は、八幡の編集委員二名が「名勝姨捨」を歩いて「三大絶景ポイント」を選んでみました。

歩いたのは四月半ばです。里は花々に包まれていました。姨捨観光会館駐車場で、案内をお願いした姨捨観光推進協議会長の宮坂武夫さんと合流して、さあ出発です。

◆ポイントその一「姨岩」

最初に、道を挟んだ長楽寺の裏にある「姨岩（姨石）」に登りました。ゴツゴツした足元に注意しながら岩の上に立ちました。「ここからは善光寺平が一望できます。今日は遠くが霞んでいますが、北信五岳も見えます」と宮坂さん。「十三の駅が見えるとも言われるんですよ」「はあ、ほう」言葉も無く、ただ景色に見とれました。ここが一つ目のポイントに決まりです。



分校跡のしだれ桜

◆ポイントその二「姨捨駅」

次に、姨捨駅へ向かいます。途中にある「月見畑」では、地元の人が毎年花見をするそうです。なぜか下半分だけがしだれていて不思議な桜の木が並んでいました。さらに坂を登ると、目に入ってきたのは、話に聞く「分教場跡地のしだれ桜」です。ちょうど咲き始めたところでした。近づくと、老木の醸し出す厳かな雰囲気を感じます。立ち止まった私たちに、頭上から鶯が声を聞かせてくれました。

大池踏切を渡って駅に着くと、宮坂さんが「あの窓を見て下さい」と指差します。大正ロマンを漂わせる建物を外から見上げると、見慣れない茶色の窓が。これは一体…？「これは亀の形なんです。昭和九年に建て替えられた時に、篠ノ井線はスピードが出ない



姨捨駅の亀の形の窓

ので、亀のイメージで作られたのですよ」なるほど。窓の存在すら知らなかった私たちですが、当時の人々の篠ノ井線への愛情に触れたような気がしました。

記念切符売り場や「くつろぎの駅」コーナーなど、もてなしの心に溢れた駅舎を通り抜けると、そこに「日本三大車窓」の絶景が開けています。説明は不要ですね。駅からの眺めは、宮坂さんもイチ押し No.1ポイントです！

◆ポイントその三「棚田の入り口の小さな高台」

続いて棚田へ行きましょう。駅の南方、一本松踏切を渡ります。長尾根地籍の道路下の民家を過ぎた辺りは、撮影ポイントとして知られる所ですが、私たちは、踏切近くから棚田を通る細い道に入りました。

左右の小さい田の間に、とても小さな高台（展望台）がありました。「ここからは、長野から戸倉の方まで見えるんですよ」宮坂さんの言葉に首

を右に回すと、確かに、戸倉駅やキテイパークのもっと先



長楽寺

までが見えています。この風景は今までに無かったものなので、三つ目のポイントに決定。

◆もうひとつのポイント

めでたく三大ポイントが決まり、急な坂道を姪石苑（鯉のぼりが目印）まで下りました。そこから西へ向かう道を五〇分ほど行くと、前方に長楽寺の全景が現われます。正面からの名刹の趣を、車道からは見ることができないので、こちらも絶好のポイントです。山門をくぐって、境内を見せていただき、石段をゆっくりに上ると、姨捨観光会館前に戻りました。およそ二時間の「探し歩記」でした。

皆さん、一度姨捨を歩いて絶景をたっぷり味わってください。特に春と秋がお勧めです。

館報編集委員（八幡）濱田 弘子
山崎摩也子



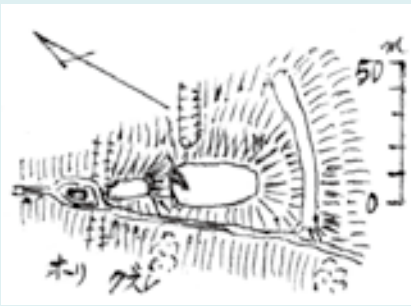
34

佐野山城跡と かつての攻防

佐野山城は、佐野西の高雄山から東方に下った、剣の刃渡り状の尾根の末端部にある中世の山城である。所在の地名は佐野山の字仏供殿である。

城は仏供殿・縄張り

西は滝の沢、南側は佐野川、東は尻垂沢の三川や堅堀、急崖に囲まれた自然要害の城である。本郭の標高は六八〇メートル、佐野川からの比高一〇〇メートルで、広さは南北三〇メートル、東西一七メートルの不整形長方形である。北遇上の郭と結ぶ馬踏がある。郭上部は削平せず尾根のまま利用し、北西に堀切を設けて地山を断ち切り、後の小山を村の古老は旗塚と称していた。



佐野山城跡図

また、本郭の西南部に鉤の手の石積（根石）が見られ、西南共に五メートル程の長さである。南急斜面下の郭は七メートルと幅は狭いが、東西六〇メートルと長大である。断崖の車橋から続く南麓の大手登路の左右を始め大小、数多くの曲輪がある。なお、水の手は滝の沢より容易に得られ、館は東北の尾根を越えた古家沢畔にあった。

攻防等の略史

築城年代など判然としないが、桑原氏が築いたものであろう。永享十二年（一四四〇）の「結城合戦」で、陣中警護や矢倉番を定めた『結城陣番帳』の廿五番に、「桑原殿 同名対島守殿 横田殿等」とあり、守護の小笠原氏に属し参戦していたことがわかる。

また、『諏訪御符礼之古書』によれば、康正三年（一四五七）から先の桑原対島守幸光が、諏訪上社の祭五ヶ月の頭役を数回勤仕し、長享三年には桑原政光に替わり奉仕していた。これによって桑原氏が当地を知行していたことは明らか

で、なお、隣郷の塩崎に進出した桑原氏の一族もいた。

文明十二年（一四八〇）の諏訪上社の祭、花会頭役に四宮庄が充てられ、その頭役人は桑原六郎次郎貞光で、更に同十七年の花会に塩崎貞光と改姓して勤仕している。そして、戦国時代には退転した桑原氏に代わり活躍している。天文二十二年（一五五三）四月、武田氏は深志、筑北から村上の葛尾城の攻略にあたった。塩崎六郎次郎は屋代氏と共に佐野山城に拠るが、『高白斎記』には「四月六日、屋代方塩崎方致同心、桑原ノ地無最ノ由御注進」と、記している。武田方の来属に、石川氏が相次いで降り、背かれた葛尾城は九日自落する。

就佐野山在城、其方知行北大塩廿三人之前、押立公事令免許者也 仍如件
天文廿四年

四月廿五日 信玄
内田監物 『歴代古案』
当地を手中にし、内田監物を佐野山の城将に据えたこと

は、西山への押さえと川中島進出の前線基地として重要視したものであった。また、永禄三年には海津の城将に転じた。この「就海津在城、其方知行北大塩（下略『文書』）」は、海津城の名の確実な初見であるといわれている。

後に武田氏が滅び、上杉景勝領となった天正十一年（一五八三）四月、海津城の副将屋代秀正は家康方へ内通し、加担した塩崎氏は佐野山城へ立て籠もった。そして、『直江兼統書状』にあるように、

逆徒居城荒砥・佐野山両地不経五三日自落、無行方為躰候、（上・下略）

衆寡敵せず荒砥城の屋代衆同様に、麻績方面へ逃れている。

重要視された佐野山城

地方侍にとっては、降るか逃げるか他に手段はなく、川中島決戦から、筑北の争奪戦へと展開していった。ともあれ、山城は多いが、至って簡単素朴な山城であるが、攻防など諸史料にその名を見られるのも珍しい。やがて塩崎氏は帰農し、上方備えに平城の稲荷山城が築かれ、佐野山城は廃されたものと思われる。
堀内暉巳

もっと知りたい
ふるさと

35

生萱
五台山文殊尊の由縁について

生萱は、沢山川の東部山裾に住宅が点在し、南には田園を懐に抱き、気候温暖で穏やかな地域です。

また、古墳・弥生時代の生仁遺跡（昭和四十五年頃の沢山川改修事業で、多くの住居址や土器などが発掘された）もあり、歴史的に大変古い所です。

◆文殊菩薩との出逢いは夢枕
時は戦国時代、元和元年（六一五）大坂夏の陣に真田幸村率いる軍に当村より三名出征しました。

戦に敗れ、五月、大坂より帰郷の途に着いた三名は、現在の大阪市東成郡嶋野村の、とあるお堂で仮眠し一夜を過ごしました。その折、三人の夢枕



文殊菩薩像

年が経つにつれ、堂の傷みが激しく、場所も思わしくないため、新たに文殊堂の建立を決め、寛政八年（一七九七）現在の埴科縣神社の鳥居をくぐった直ぐ右側の文殊が丘に建立しました。
以来、幾星霜経過し、

に文殊菩薩が現れ「私をこの戦場から連れさせて信濃へ連れて行って欲しい」とのお告げがありました。三人で相談し、我々がこの戦で命が助かったのも何かのご加護の賜と、菩薩を信濃の故郷へ連れて行くという意見が一致し、命がけの帰郷の長旅が始まりました。追手に捕り、殺されるのではないかと安眠も出来ず、野越え、山越え、川越え、命からがら菩薩を大切に守りながら、生萱まで無事帰る事が出来、早速村人に一部始終を語りました。

村人は大喜びで、文殊さんのご加護の賜と阿弥陀堂（現長坂地籍）に仮安置して、毎日供養を続けておりました。

その間、文殊堂は子ども遊び場となり、長年風雪に晒され、雨漏りも激しく、哀れな状態になってしまいました。

◆第二の再建の夢枕
そんなある日、村の先人の夢枕に文殊菩薩が現れ「このまま風雨に晒されるのは耐えられない」とのお告げがありました。

関係者が急拠相談し、再建と意見が一致しました。
早速各方面にお願ひし、村人はもとより近隣の方々や、趣旨にご賛同頂いた方々に多額のご寄附を頂戴しました。幸い市有林の檜木材をご心配頂くとともに、地区の匠の方々に献身的なご尽力を頂き、見事な文殊堂が完成し、昭和六十年五月、落慶開眼法要を盛大に執り行いました。

◆新たなスタート
以来、役員により毎月二十五日には月並法会、一月は合



再々建した文殊堂（昭和 60 年 5 月落慶記念）

格祈願法会、七月は茅の輪くぐりで保育園児を招待し、読経後参詣して頂きます。また、年末年始は越年祭などの行事を行っており、多くの方々にご参詣頂いております。
日本三天文殊（安倍・切戸・亀岡）を始め、近隣の文殊堂を参詣する旅を企画し、地区内の多くの方々にご参加して頂き、現在、文殊尊奉賛会として地区内四組より役員総勢一二名で行事の執行をしております。郷土の文化遺産が未来永劫に伝承され、信徒の皆様限りなくご利益を授けて頂きますように祈願するところで。

生萱文殊尊奉賛会
会長 島田 武久

もっと知りたいふるさと

36

徳川家の天領地 — 杭瀬下の歴史 —

「昔は杭瀬下村は御天領であつたから、松代藩での農民一揆の騒動などで、多くの人

が夜杭瀬下を通過するとき、たいまつを下に向けておそろおそろ通りすぎたものだ」と

いう話を大正から昭和のはじめ頃、古老からよく聞いたものであつた。村民も多少の優

越感と自尊心あるいは誇りのようなものを持っていたようである。

一体、天領ということは、どういふ土地柄であつたのであろうか。天領は幕府直轄の領分で、これを「御料」という。天領といふのは俗称である。徳川の領分は俗に八百万石。そのうちの約半分を旗本たち

に知行地として与え、残りの四百万石が徳川家の天領地となつてゐる。

江戸時代では、人間一人あたり一年間の必要生活費は、一日米五合の計算である。

坂木、中之条天領の歴史的変遷をみると、天和八年（一六二二）に幕府直轄領となつたが、十三年後私領地となり、元禄十五年（一七〇二）十二月坂木藩板倉氏が、福島へ移つてから再度天領地になり、

明治元年まで一六五年間続いたのである。坂木五千石十四か村は農業生産的にも価値のあるところであつた。

杭瀬下村は約五八〇石、新田村は約一六八石で、この地は幕府の蔵入地であるから代官支配となつてゐる。

代官は年貢取納を中心にして村々の庄屋、百姓らを支配してゐる。その他手付・手代があり、

その下に書役や侍・足輕・仲間・小者など所属してゐる。

杭瀬下、新田村は、信濃国埴科郡坂木領の村高と年貢は、全体の貢租は約三三割であり、

江戸時代の一般農村の平均値五公五民の五〇割より低率である。

しかし、杭瀬下・新田村は山林に恵まれず松代藩所有の西山への入札を購入してから入山燃料を求めた。

また、中之条代官所は、領内の杭瀬下・新田両村が水害のための減免申請を受け、御林（幕府管理地）から正徳五年（一七一五）（一札之事）として川除普請用木、柏木合計一五〇本の払下げをした受取證がある。さて、代官を通じて

田から年貢を、畑から畑年貢（物成）、千曲川から魚をとつたり、川に舟を浮かべれば「小物成」という税を納めたのである。そして一俵につき一升の「込米」あるいは欠米の用意、手付、手代用の給料の「口米」は一俵で一升、一俵が三斗五升として、もう五升ずつ余分に用意しなければならない。

しかし、天領下の免（税率）は、およそ三割納であつたので、粟佐村の農民が、「お宅は年貢が低いからいいね」と、もらしたという。

当時の農民改革として、一般には農家育成の一法として、田畑の永代売買を禁止した寛永三十年（一六四二）置、慶安の「お触書」には「年貢さえすまし候得ば百姓ほど心易きものは之無」とあるが、年貢完納するため、平素の心掛けについては、その条文によつて、当時の厳しい農民の姿がよく分かる。「朝起き致し、

朝草を刈、昼は田畑耕作にかかり、晩には繩をなひ、たわらをあみ、何にてもそれぞれの仕事、油断無く仕事すべきこと」酒、茶買のみ申しまじく候、食物を大切に仕えべき候に付、雑穀專一に候間麦・粟・稗・菜・大根共外何にても雑穀を作り、米を多く喰ひつぶし候はぬようつかまつりべき候」というように、細部にわたつて指令してゐる。



坂木五千石地帯略図（『更級埴科地方誌』）

杭瀬下 近藤 明
参考資料『杭瀬下村誌』



清水神社にある「力石さま」

もっと知りたい
ふるさと

37

「力石」って
いろいろな歴史がある

◎善光寺平の稲作は力石から始まった？

力石には、弥生時代の始め（約二千二百年前）から人々が生活していたようです。

これは、主要地方道長野上田線の「力石バイパス」建設事業に伴い、二〇〇一年から七年をかけて、道路用地となる場所を「長野県埋蔵文化財センター」が発掘調査してわかったものです。

中でもこの調査によって注目されたのは、弥生時代前期末～中期中葉の墓跡と弥生時代後期の集落跡が確認された

ことです。

墓跡の中からは、焼けた骨や副葬品と思われるものが完全な形の壺などとともに発掘されています。土器の中には、地元で作られたものに混じって東海地方で作られたと思われる物も発見されています。

このようなことから、この地方の米作りの技術が弥生時代の初期に力石に伝わっていたことが認められます。そして、稲作が徐々に長野盆地（善光寺平）に拡がっていったことが想像されます。

◎「力石」という地名の由来は？

力石地区の中心からやや北寄りに「清水神社」という社があります。その参道入り口付近に大きな二つの石が祀ってあります。この石は、千曲市の文化財にも指定されている「力石さま」です。

千曲川の洪水が運んだと思われるこの巨大な石が「力石」という地名の誕生にも大きなかかわりをもっています。里人が力の強さを競い合ったり、

古代から巨石を崇拝する信仰をもっていたりしたことに由来する「力石」という地名が生まれたものと思われます。

その年代は定かではありませんが、安土桃山時代（一五〇〇年代後半）村上氏の一族である村上成国が村上郷出浦に分地して出浦氏を称し、三郎藏人重義が同郷力石に分地して「力石」を称したとされています。

ところで、「力石」という石は「全国に一万四〇〇〇個あるそうで、現在も「ちから石」による力試しは全国の約十か所で行われているといわれています。しかし、「力石」という地名は、高知県の津野町にある力石と当地の二か所だけです。

◎力石は「田舎の江戸」と呼ばれていた

力石は小さい面積ながら肥沃な土地に恵まれ、文化文政時代から養蚕業が盛んになり、農業以外の商売をする人も数多くいたことがわかります。資料によると、繭の仲買人



平成 25 年 1 月に発行した冊子

はもとより蚕種売から木工・鉄工・建設業者・質屋・油絞り・漁業者・酒造り・髪結いなど二七種もあつたと記録されています。明治になってからもそのまま繁栄が続き、多くの商店も出来、繁昌していたと思われます。事実、終戦の昭和二十年頃までは近隣の村々からも大勢の人々が買い物に訪れ、本当に何でも間に合う便利な村として賑わっていたことが伺われます。こんなことから「田舎の江戸」と呼ばれていたものと思われれます。

◎新時代に対応できる力石に
力石は、上山田地区の南に位置する小さな地域ですが、先人たちが築いてきた気質は今も生きております。自分のふるさとに誇りと愛着を持ち、この歴史や文化を次の時代に受け継いでいかなければならないと思えます。

「力石を語る会」望月照一



38

国の重要文化財 水上布奈山神社

慶長八年（一六〇三）北国街道が新設され、沿道には次第に宿場が設置された。下戸倉宿もこの頃に作られ、江戸時代には諸大名の参勤交代や善光寺詣りで賑い栄えた。

水上布奈山神社創建の時期は不明であるが、遠い昔、信濃国を開拓した建御名方神を諏訪大社に祀り、やがて全国に分社が五千余社出来た。下戸倉宿も現在地の高燥の良き地を選び、ささやかな社殿を建て祭神に建御名方神を勧請し、ここを鎮守と名づけ諏訪社としてあがめ祀った。

諏訪社名が水上布奈山神社



水上布奈山神社正面

になったのは天保六年（一八三五）四月三日京都の神祇官領下部家から社号を允可されたからである。

諏訪社は千曲川の洪水に度々流失したが、現在の神社は、天明五年（一七八五）当時の氏子一八八軒が名主を先頭に村役人、村人が総力を結集し、五年の歳月を費やして寛政元年（一七八九）四月に全面的に建て直されたものである。

この神社造営時の棟札には銘が記されているが大工棟梁名がなく、



長い間、作者不明であったが諏訪宮大工の研究家故細川隼人先生をはじめ県文化財保護審議会委員故米山一政先生、同委員千葉大学工学部教授大河直躬先生等諸先生方の調査により、諏訪普門寺村大隅流大工棟梁柴宮長左衛門矩重の作であることが明瞭になった。

柴宮長左衛門は延享四年（一七四七）諏訪藩大工棟梁伊藤弥衛門の四男として生まれ、

初め村田家、ついで柴宮家の養子となった。長左衛門が大隅流を唱えたのは、養家の村田家が諏訪藩に仕える大工で大隅流であったからであると前述の細川隼人氏は述べられている。

天明五年（一七八五）四月、柴宮長左衛門が善光寺詣りの途中、下戸倉宿の鳥居屋重郎右衛門宅に一泊したところ、社殿造営の話があり、重郎右衛門の世話で長左衛門が造営工事を請け負うことになった。以後五年の歳月を費やして寛政元年（一七八九）四月に完成した。時に長左衛門四二歳で当社はその代表作である。

全面的に建て替えられた本殿は総檜材の白木造り、本殿間口五米奥行三米五十糎の間社流造で規模が大きく、県内の一聞社流造の中では一、二を争う大きさといわれ、正面の軒に唐破風をつけた装飾の多い造りである。



上り竜

この本殿を調査された千葉大学教授大河直躬先生は、『水上布奈山神社社誌』に「この本殿の特色として、先ず彫刻が優れていること、次に社殿にある彫刻の数が多いこと、しかもただ数が多いだけでなく蘇鉄に兎、竹林の七賢人、波に亀や飛龍、仙人像等々、彫刻の主題の豊富さは目を奪うばかりである」と書かれている。

長野県の生んだ名工では、長左衛門と同じ時期に諏訪から出た立川富棟やその子の富昌が有名であるが、立川流の合理的な建築に対し、経済的な収支を考慮しない昔気質の長左衛門の作品の方が個性的でダイナミックな躍動感に満ちている。

長左衛門の遺作である水上布奈山神社本殿は昭和六十三年（一九八八）に、国の重要文化財に指定された。

戸倉 柳澤穂積

もっと知りたいふるさと

39

県下初のドラマチック姨捨サービスエリア



リニューアルされた姨捨サービスエリア

入り口の左右には「月の里おぼすて」の赤と紺の大きな暖簾がかけられ、今までのSAのイメージを一新する、和風モダンの洗練された雰囲気の中に包まれています。ショッピングコーナー

善光寺平を一望でき、夜景の名所として秘かな人気がある姨捨サービスエリア（以下SA）。このSAがリニューアルし、一層魅力を増したというニュースを耳にしたので早速体験に行ってきました。今回のリニューアルは、ネクスコ東日本が展開する地域



おやきや杏ソフトなど名物が食べられます

「旅見世」の隣にはテイクアウトの店「月の里カフェ」。地元産の小麦ユメセイキを使ったおやき・そばクレープ・杏ソフトなどが売られています。これらを食べることが出来る

奥にはフードコート「おぼすて月見茶寮」があります。メニューには本格的な手打ちそば、地元味噌を使ったラーメン、杏を上手に生かしたカレー等が並びます。私たちも食べてみました。手頃な値段以上の美味しさで、とても満足しました。お腹も満たされ、窓外の陽光に誘われ外に出ると、まだ雪を被った飯綱山、人々が暮

「月の里おぼすて」の構成され、棚田や千曲川の流れを連想させます。まず目に入る建物の外観は、黒と茶を基調としています。バリアフリーに配慮された階段は曲線で構成され、棚田や千曲川の流れを連想させます。



切り絵をあしらった休憩コーナーの照明

らす大地を曲がりくねって流れる千曲川が、春の陽射しにまぶしく光っていました。ここが高速道路を利用して

いる人たちの休憩施設に留まらず、食事を楽しんだり、お土産の買い物等に訪れるスポットに発展し、古い歴史と文化的にも奥深い里「信州姨捨ここにあり」と発信し続けるサービスエリアになって欲しいと思います。皆さんも姨捨SAに出かけてみませんか。

館報編集委員（八幡）
吉池 啓子
須田多恵子

もっと知りたいふるさと

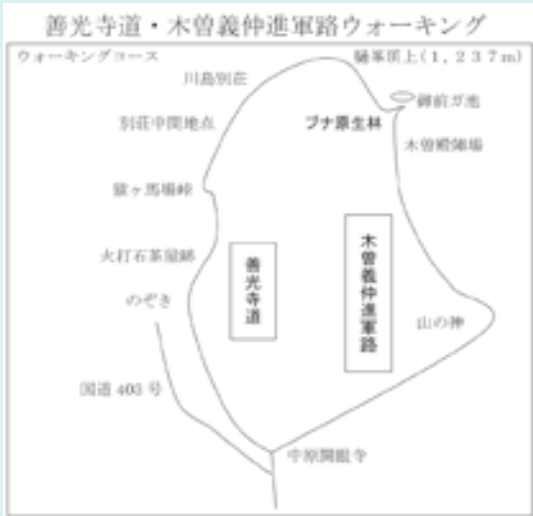
40

「信州山の日」に協賛して

千曲市内で循環型ウォーキングルートを開拓して、市民が親しんで歩けるコースを」と検討を重ねてきました。

善光寺街道開設400年を記念して善光寺道を歩き、北陸新幹線が開業されるのを機に、木曾義仲・巴御前が北陸經由で上洛までの出世街道と想いを重ね、800年前のロマン、木曾義仲進軍路コースを組み合せた街道歩きを提案します。機会があったら歩いてみてはいかがでしょうか。

簡単にそれぞれのポイント



をお話します。

○善光寺道

善光寺道は、中山道洗馬宿から篠ノ井追分までの北国西往還と北国街道篠ノ井追分から善光寺宿までの19里半(80km)をいう。善光寺道の大部分を占める北国西往還は慶長19年(1614)に開設され、今年2014年は善光寺道開設400年の年である。宿場は、洗馬宿・郷原宿・村井宿・出川宿・松本宿・岡田宿・刈谷原宿・会田宿・乱橋宿・西条宿・青柳宿・麻績宿・桑原宿・稲荷山宿・篠ノ井追分宿・丹波島宿・善光寺宿の17宿がある。

丹波島宿・善光寺宿の17宿がある。

今回歩くコースは善光寺道で最も険しい峠越えの中原開眼寺から伊勢信仰等を含めて上方方面に向かつて峠を上り、猿ヶ馬場峠までの区間である。街道は林

道の開通で破壊されたとはいえ、街道の原形および史跡が多く残っている。

千曲市川西地区振興連絡協議会は平成19年から街道整備を続け快適に歩けるように取り組んでいる。

○木曾義仲進軍路

久寿2年(1155)源氏一族の内紛により、北関東地方に勢力を張っていた源義賢は、兄の源義朝に武蔵野国大蔵館を攻められ義朝の長男悪源太義平に討たれた。義朝の家臣齋藤実盛は2歳の駒王丸(義仲の幼名)が殺害されるに及び難く、その母小枝御前と共に、信濃国の権守中原兼遠のもとに遁れさせ匿われた。駒王丸は現東筑摩郡朝日村の真言宗光輪寺で成長する。『吾妻鏡』によると、平氏追討を命じる以仁王の令旨は木曾義仲の叔父源行家により東国諸国の源氏にもたらされた。

この令旨を受け取った義仲は頼朝の拳兵を聞き、これに参じるために出陣した。平家物語では成長茂が、義仲追討



御前ガ池

の為兵4万騎を率いて横田河原に布陣、これを聞いた木曾義仲は3000騎で出陣する。木曾義仲軍は麻績側北山地籍の木曾殿城に陣を敷いて横田河原の決戦に備え、進軍路として樋峯を下り更級郡側に進んだ(筑摩越え)。

この戦いで勝利を治め、こののち俱利伽羅峠、篠原の合戦と勝利を重ね、義仲は源行家を伴って入洛したが入洛後平家追討と都の治安を任されるも期待が落胆に変わり支持は落ちた。やがて後白河院の要請を受けた頼朝軍の攻撃に遭い、最後は今井兼平と主従2騎のみとなり、粟津で終焉を迎えた。

これらの歴史を背景に史跡を訪ねていざ出発しましょう。千曲市川西地区振興連絡協議会

事務局長 山口 盛男